

その1. インフルエンザは、いつもやってくる。

副学長（兼学部長）教授 萱場一則

中世ヨーロッパ人はインフルエンザの流行には星の影響など超自然的な力が関係すると考えていたといえます。“影響（インフリュエンス）”とインフルエンザは語源が近いらしいとのこと。現代の日本では、流れ星とは関係なく、寒くなると、乾燥とともにインフルエンザの季節がやってきます。いったん流行が始まると、短期間に多くの人へ感染が広がります。日本では、と書いたのは、世界的に見るとそうでないところも多いからです。寒くも、乾燥してもいない熱帯地方でもインフルエンザは、年がら年中、流行しています。

インフルエンザは言うまでもなくインフルエンザウイルスの感染症です。ウイルスはその昔はビールスと書いきましたが、1970年頃からウイルスに変わったようです。その当時、強力な抗生物質の開発などにより、感染症は克服されたと勘違いされていました。もう“終わった”病気だと思われたのです。

ところが甘かった。1980年前後からエイズ、C型肝炎、新型インフルエンザウイルス、SARS、そして今、西アフリカを中心に猖獗を極めるエボラウイルス感染症など、感染症の大流行時代に突入しています。

一昔ならば風土病として一地域の流行で終わった感染症が航空機輸送の発達等により、あっという間に全世界に拡散する可能性が高いことになります。西アフリカのギニアを出発してから埼玉の地まで一日あれば着いてしまいます。一日というのは、エボラウイルスに感染しても発病しない期間より短く、感染したことに気がつかない、あるいは診断できないまま来日し、日本で発病して周りの人に感染を広げることができることになってしまいます。すなわちエボラは、いつかは日本にやってきます。

新型インフルエンザも同じくらいの潜伏期です。一地域の感染症が、あっという間に世界流行を引き起こす時代です。2009年の新型インフルエンザはメキシコから日本まであっという間に拡大しました。インフルエンザは、いつもやってくることになります。

インフルエンザと“普通の風邪”はどう違うのか?とよく聞かれます。普通の風邪は様々なウイルスによって起こりますが、多くは、のどの痛み、鼻汁、くしゃみや咳等の症状が中心で、重篤な全身症状はあまり見られません。発熱もインフルエンザほど高くなく、重症化することはあまりありません。

一方、インフルエンザは、典型的には、38℃以上の発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛など全身の症状が突然現れます。“からだがかかりきつい”ということになります。子どもではまれに急性脳症を、高齢者や免疫力が低下している方では重症肺炎になることがあります。もっとも、多くの感染症に言えるように、感

染しても何ともない人や、ちょっと具合が悪い程度の方もいます。その辺がこの種の病気への対処を難しくしている一因です。

インフルエンザの迅速診断を最寄りの医療機関で受けることができます。インフルエンザと診断、あるいは疑いが強ければ、禁忌（薬を使ってはいけない条件）が無く、発症早期（2日ぐらい）であればインフルエンザ治療薬が処方されます。注意が必要ですが、この薬はいわゆる“風邪薬”ではありません。風邪薬として薬局で市販されたり、医療機関で処方されている薬は、熱を下げ関節の痛みを抑える鎮痛解熱薬と鼻水鼻づまりを和らげる抗ヒスタミン薬にビタミンB類や漢方成分を加えた複合薬です。症状は緩和してくれるがウイルスの体内での活動を抑えてくれるわけではありません。いずれにせよ具合が悪くなったら早めの医療機関が肝要です。

最後に予防。十分な休養とバランスのとれた栄養摂取、人混みや繁華街への外出を控える等がありますが、世の中の事情で実施できない方も多いでしょう。外出後の手洗い、室内の適度な湿度の保持、不織布(繊維あるいは糸等を織ったりせず、熱や化学的な作用によって接着させて布にしたもの)製マスクを着用する等はある程度有効です。

インフルエンザワクチンは、感染後に発病する可能性を低減させる効果と、かかった場合の重症化防止に有効とされます。気になるのは副作用ですが、注射部位の腫れや発熱、全身倦怠感等の比較的軽微なものは多いです。

一方、神経障害、脳障害、血液疾患など重篤な副作用もありますが、頻度は少ないです。ワクチンによると疑われる死亡も毎年0～数例は厚生労働省へ報告されますが、死亡とワクチン接種の直接の明確な因果関係は証明されていないようです。多くの人にとっては接種の利益はありそうです。